

九州と日本のために、アジアに向けた国際軸を作り込む都市を目指して欲しい。

—— 株式会社はせがわ 代表取締役会長 長谷川裕一氏



長谷川 裕一（はせがわ ひろかず）

1940年福岡県直方市生まれ。龍谷大学文学部仏教学科卒。

1982年に株式会社はせがわ代表取締役社長、2008年に代表取締役会長に就任。九州経済フォーラム初代会長、社団法人日本ニュービジネス協議会連合会会長、茶道遠州会本部理事長、九州工業大学産学連携推進センター客員教授、九州大学総長アドバイザー会議委員。

文化力を高め、一芸を持って海外と接するべし

私はこれまで九州を世界で最も魅力ある場所にすることや、九州の地位向上と活性化を目標に、ニュービジネス協議会の活動を通して新規事業に挑戦している各種の事業者を支援したり、「博多21の会」を作って福岡に企業基盤を持つ若手経営者や文化人を育てたり、産・官・学から成る「九州経済フォーラム」を立ち上げて、九州の次世代を育てるなど様々な活動をしてきました。しかし、残念ながら、経済規模を比較すると、九州の経済界は東京や大阪の経済界にたちうちできない状況が続いています。地元の若い経営者は、金脈にとどまらず人脈でも、とても関東や関西の経営者にかないません。

こういう状況ですが、私は人間力を高める文化こそが、地域に関係なく対等に勝負できる強みになるのではないかと考えています。東京の企業はサラリーマン経営者が多く、深く文化に関わっている方が少ないと思います。他方、九州は昔から小唄、清元、尺八や能などの芸能との関わりが深く、地元の経済界では声をかけ合って勉強したりもしています。

アジアは文化が豊かな地域であり、アジアの裕福な人たちは世界を相手に経済交流だけでなく文化交流も積極的に進めています。アジアの人たちと対等につき合うには、アジアの人たちからあこがれられる日本人になるため、素晴らしい振る舞いのできる胆力と文化力を持った人間を育てるべきでしょう。

私は、遠州流の茶道のお稽古を30年近く続けていますが、茶道や華道、清元や小唄ができる経営者がいて、また博多祇園山笠もあれば博多どんたくのような祭もある、そのように一芸を持ってアジアや欧米と接することを九州経済界の特徴にして欲しいと願っています。特に、茶道は日本文化の総合芸術と言えるでしょう。お茶だけでなく、茶室等の建築、庭園、床の間の掛軸（書道）及び活け花、和歌、懐石（料理）、お菓子、それから茶道具の鉄、漆器、陶芸のようなものづくり、和服、歩き方などの作法まで、あらゆる生活万般の日本文化が形式化、儀式化されたものです。是非九州の色々な立場の方々に学んでもらいたいと思います。

常にアジアと一衣帯水で進むべし

1986年、九州経済フォーラムを立ち上げた時、京都大学の矢野暢教授に顧問になっていただきました。矢野教授は、日本の次代の発展を担う国土軸について、東京から九州に至る第一の発展軸は、地価や人件費の上昇、設備の老朽化、国土全体のバランスよい発展を考えると、東京から仙台に向かう第二の発展軸に移るであろう。そうした時に、九州の発展は東日本に吸い取られる可能性があるため、九州を活性化するためには、福岡からアジアに向かう、第三の発展軸を念頭におくべきで、アジア太平洋博覧会の意味をこのような文脈から危機感を持って捉えるべきだと説かれていました。

これはもっともな話だと私は思い、その後九州の経済界や政治家に理解を深めていただき、1989年福岡市制100周年を記念した福岡アジア太平洋博覧会（よかトピア）を成功させるお手伝いができたと思っています。博覧会翌年、残った資金を元手に福岡アジア文化賞の創設にも動きました。福岡は古くから日本への文化の受け入れ窓口として、アジアとの交流において重要な役割を担ってきましたが、アジアの人たちは長崎や広島を知っていても福岡を知りません。アジアの教科書に「福岡」が載るようにしようとアジア文化賞を始めたのです。

また、1993年よかトピア会場跡地への福岡ドーム（現 福岡 Yahoo! JAPAN ドーム）建設にあたっては、地元経済界の反対があったり、ビル・エモットの『日はまた沈む』で日本のバブル崩壊予測が取り沙汰されたりして、ドーム建設が頓挫しそうになったのですが、当時のダイエーの中内功社長に第三発展軸構想の話をして納得していただいた結果、バブルが崩壊した中でも、福岡だけはドームを作ることができたのです。翌年の王監督の就任ももちろんこのアジアに向かう第三発展軸の戦略の一つだと

認識しています。

このように九州・福岡はアジアに向かう第三発展軸のもと、アジアと一衣帯水で進むことを常に考えておくことが必要であると思います。

福岡に世界の頭脳を集めるべし

ところで、福岡アジア文化賞の創設時に、審査選考を東京や関西の学者に任せるのではなく、福岡で選考できるように、福岡に世界の頭脳を集めることが重要だと考え、福岡に大学院大学、特に都市問題研究の世界の先端センターをつくってはどうかという提案をしました。これはうまく進みませんでした。この考えは今でも変わりません。

具体的なイメージとしては、アジア文化賞の事務局であるとともに、都市学に関する世界のトップリーダーを結集させ、都市学に関する世界のセンターを置くことです。世界的に今後都市問題が増えてくることが予想されますが、人々の仕合わせと都市の問題、文化と都市の問題を含め、世界の頭脳が結集するところになるのはどうでしょうか。センターの教授がアジア文化賞の選考委員を兼ねれば、ノーベル賞受賞者を選考する委員会があるスウェーデン王立科学アカデミーのように、自ずと世界中からコンタクトが来るはずで。

今の世の中の動きを考えると、原子力の安全研究センターをつくることも一つのアイデアではないでしょうか。準備に数年はかかるかもしれませんが、九州の大学と連携しながら、世界の原子力のトップ研究者を結集させ、東京の大学にも負けないものにしていってはどうか。唯一原爆を投下された国、福島原発事故の経験を持つ国として、これから中国・アジアは原発を増やしていきませんが、平和利用と安全については絶対避けて通れない課題ですので、国も市も電力会社もお金を出して、思い切った取り組みを進めてもいいのではないで

しょうか。

過去には、梅原猛氏が中曽根首相時代に国際日本文化研究センターを京都に作って、ドナルド・キーン氏を始めとする日本文化を研究する権威的な研究者を集めました。これは 100 億円単位の予算を国から引き出す力があつたからだと思います。アジアの文化や都市、あるいは原子力安全に関する研究機能を福岡に位置づけるためには、強い意志を持った、お金を集めることができる仕掛け人がいないと実現できないことも事実でしょう。

日本全体のことを考えるべし

ところで、私は法務省の憲法研究会など、憲法に関する様々な勉強会・委員会に招かれ、講師を務めてきました。私は今の憲法は植民地憲法であるとの認識を持っています。今の憲法は敗戦後、アメリカが日本を統治するために終戦前より数年かけて熟慮を重ねて準備し、作られたものです。

学校教育では大東亜戦争（太平洋戦争）に突入した細かい経緯や、終戦後の様々な日米間の駆け引き、その後の冷戦構造に起因する警察予備隊創設、安保闘争、学生運動などについて、詳しい学習が行なわれていませんが、様々な歴史を理解した上で、私はこの国が本当に自立するためには、国家の基礎をなす憲法を変えなくてはいけないと思うのです。

何を申し上げたいかという、九州のことを考えるにあたっては、九州のことだけ考えていてはだめだということです。国家の姿はこうあるべきだ、その中で九州はこうあるべきだという議論がないと、国家が変わったら存在意義がなくなるのです。一地域のことを考えるにあたって、国家の形をどのように変えていくべきかの考えを持つ必要があるのです。

まずはアメリカの属国ではなく、パートナーになることから始めないとはいけません。

空港に投資すべし

福岡空港に関しては様々な議論がありますが、私は空港に 1 兆円規模の投資をするべきだと思います。遅きに失してはいますが、今からでもやらないよりやったほうがいいでしょう。そうすることで、福岡はアジアとともに発展して、日本もまだ伸びていくと思います。

中国に企業のアジア本拠地を置く流れがありますが、歴史を振り返ると、中国ではやはり様々な不確実性に見舞われるのではないのでしょうか。形は中国に置いておいてもいいかもしれませんが、実質的な機能は福岡に置くことが一番だと思います。そのためにも、世界中と福岡をつなげる仕掛けが必要で、滑走路が 2 本ある 24 時間空港があることで、世界中の企業が、安全で暮らしやすく、文化レベルの高い福岡に拠点を置くことになるでしょう。そうすると、日本国内の状況もまるで変わると思います。東京を通過して、福岡が東京をリードするようになるのではないのでしょうか。

福岡が東京をリードするというのは、私の昔から一貫している夢です。福岡が東京と対等につき合うようになり、日本がアメリカと対等につき合うような社会になるといいですね。全部九州が自前で整える必要はありません。優れたリーダーが九州全体を特区にする感覚を持って世界から人と金を集め、利益を応分に還元していくコントロールをしていくのが理想です。

教育を徹底すべし

最後にお伝えしたいのは、地方自治体でもできる重要な取り組みである教育です。私は、青年会議所時代に徹底して教育問題について議論し、当時の国立教育研究所の所長とも親しくなるぐらい取り組みましたが、一番基本的な人間観についての教育を徹底することが重要だと思います。

いくつか段階がありますが、まずは胎教や3歳児までの教育でしょう。「三つ子の魂百まで」と言われるように、ここを疎かにしてはいけません。日本の教育は、古くから江戸時代までここを大切にできてきました。織田信長の時代にはフランシスコ・ザビエルが、「私が世界で見た人の中では、日本人が一番傑出している」と書いていますし、豊臣秀吉の時代にポルトガル人宣教師ルイス・フロイスは、「日本の子供は10歳でも使者の任を果たし、その判断と思慮において50歳にも見られ、その立ち居振る舞いは落ちつき、優雅を重んじて、非常に完全で、全く賞賛に値する。また、日本の子供は恥ずかしがらず、のびのびして愛きょうがある。そして、演ずるところは実に堂々としている。」(『日欧文化比較』)と記しています。私も10歳のときには、嘘をついてはいけない、弱い者いじめをしてはいけない、ひきょうなことをしてはいけない、逃げてはいけない、正義感が一番大事だ、公のために尽くすんだ、人様のためにお役に立つんだと、本気で思っていました。幼児教育がいかに大事かということです。幼児期に徹底して教育をして、人間力をつけることは、地方自治体でできることではないでしょうか。

次に、あこがれる人をつくるための偉人教育が重要です。そのためには先生の意識改革が必要でしょう。

また、世界中の国を愛するには、まず自分の国を愛することが基本で、自分の郷土を愛すること、自分の家族を愛する教育が重要です。郷土づくりに参加し、自分が郷土をよくしていくんだという思いを持つ、郷土を愛する人間を育てないといけません。

分野別には、科学技術立国を支える人材を育てるために、子供のときから科学技術に興味を持てるような教育をすることが重要だと考えます。また、国語教育もしっかりしないといけ

ません。子供のときから短歌や俳句をつくり、和歌を詠める品格の高い民族にしていくことは重要だと思います。漢文や経典の素読ができること、日本の名文を読めること、日本の国文学についてのすごさを知ることなど、日本文学に接することで豊かな感性、想像力を育み、この豊かな想像力を養う日本の美しい自然、四季に親しむような教育が必要でしょう。

そして、エリート教育も重要です。エリートというのは、奉仕をする人のことで、公のために生命を捧げるのがエリートだと思います。恵まれない人たちやお年寄りを含め、全ての人々が安心して暮らせるようにするエリートがたくさんいて、その人達が世界中で活躍できるようにすべきだと思います。

さらに、ビジネス英語の教育も徹底して行う必要があります。但し、英語はあくまでも道具ですので、感性や人間力を育てるのはやはり日本語でやるべきでしょう。

デザイン教育も大切です。世界のデザインを知るために、若い人を世界中に派遣して勉強させ、世界中のデザインを九州に集約するような試みもあっていいのではないのでしょうか。地元での取り組みにデザインについて協力するような、世界レベルのデザインセンターができれば良いですね。私は日本のデザイン力は世界一だと思います。

以上のように、九州に英語力、デザイン力、科学技術など様々な能力を育て、世界中の知識を集めていってはどうでしょうか。人を育てるのはそんなに大金が必要なわけではありません。

インタビュー日:2011/8/26 文責:URC 天野